

# 座間大凧の血脈

ルーツ

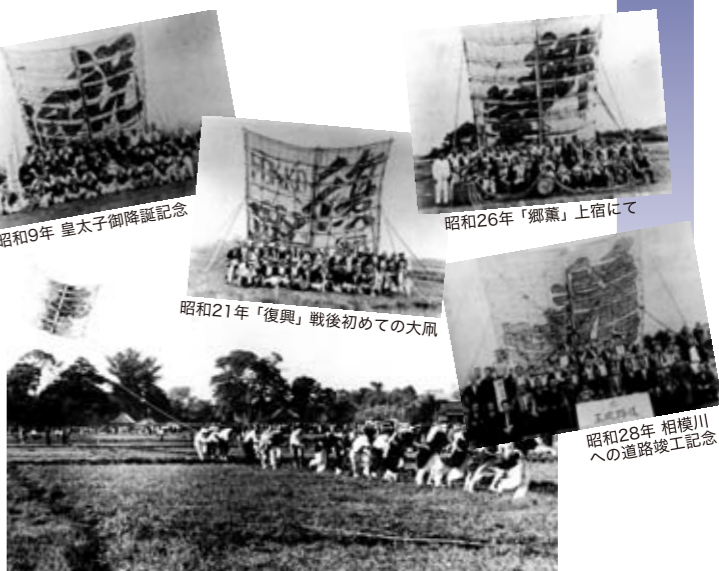


一年に一度、千変万化する天候のわずかな機会を狙い、相模川上空に浮かび上がる巨大な大凧。古より悠久の刻を越え、今でも受け継がれている伝統行事。その迫力のある雄姿に、思わず歓声が湧き立つ。

## ■大凧の文字

**座** 間の大凧は文字凧で古くから二文字とされ、その時々で世情にあった文字が書かれてきました。

現在は、毎年一般公募を行い時勢に合った凧文字を選定しています。大凧の文字書き作業は、まつりの2週間前に座間小学校体育館で行われています。この日は大凧保存会会員に加えて市内の子供たちも参加し、名人が炭で素描した大きな和紙に赤と緑の染料を塗り付けます。1文字目となる右上の文字は太陽を表す赤で塗り、2文字目は左下に大地を示す緑で塗られます。この着色も座間の大凧の伝統に就ったものです。



昭和9年 皇太子御降誕記念

昭和26年「郷黨」上宿にて

昭和21年「復興」戦後初めての凧

昭和28年 相模川への道路竣工記念

相模台下駅東側(昭和26年撮影)

## ■大凧の歴史

**座** 間の大凧揚げは、男子、特に長男の誕生を祝い、その健やかな成長を願って行う「祝い凧」の風習であり、文化・

文政年間(1804年~1830年頃)より行われてきたと言われています。当初は2間(約3・6m)四方程度の凧を、初節句を迎えた各家で制作し、揚げていましたが、当時の有力者や資産家によりさらに大きな

凧が作られるようになりました。やがて、集落ごとに凧作りに取り組むようになり、現在の大きさ(10~13m)になったのは明治時代からと言われています。高度経済成長期以降は大凧揚げの会場である田畑の減少、担い手の減少を受けて一箇所の会場で凧揚げが開催されるようになり、昭和50年に大凧保存会が結成され伝統を継承しています。

## 大凧まつり



13m四方、重さ1tに迫る大凧を100名以上の引手が力を合わせて引く様は壮観です。昭和57年には「かながわのまつり50選」に選定されるなど座間だけではなく神奈川県を代表するまつりとなっております。市外からも多くの来場があります。

《開催期日》 5月4日、5日

《会場》 相模川グラウンド(座架依橋北)

《主催》 座間市大凧保存会

《問い合わせ》 座間市環境経済部商工観光課  
電話 046(252)7604

# 入谷歌舞伎と鈴鹿・長宿の血脈

ルーツ



農民とが関係し合い、地域の活性化に繋がっていたのです。歌舞伎保存会は現在では神奈川県に4つの団体しかありません。先人たちが苦勞の末に残してくれた伝統文化をしっかりと次世代に残していきたい。その為にも、地盤となる地域の結束が大事だと思います。



**鈴鹿明神社例大祭**  
毎年8月1日に本神輿の宮出しが行われる。前日の7月31日の宵宮祭から2日間に渡り開催される重要な祭事。神輿保存会「入谷陸」による神輿担ぎは迫力あり。



入谷歌舞伎会相談役・鈴鹿・長宿地区街づくり協定運営委員会会長 吉川正昭さん

## ■鈴鹿・長宿に伝わる農村歌舞伎

**座** 間における歌舞伎の始まりは、口伝によるものは明治15年、菊田座による立上げからとなります。昭和5年まで盛んに行われていたようです。その後、世界恐慌、太平洋戦争の影響により昭和39年東京オリンピックの年まで休会。昭和46年3月30日に「座間歌舞伎」として無形文化財となるものの、昭和58年には会員の高齢化のため再び休会。そして平成8年に教育委員会主導

のもと、有志17名により再スタート。平成15年に《安藤為次奨励賞》を受賞しました。現在では37名の会員と子供たちの協力により入谷歌舞伎会として公演を行うほか、市内小・中学生を対象に教える「歌舞伎字」は、子どもたちの情操教育の一環になっています。江戸時代から興った農村歌舞伎は、神社の神楽殿で舞う本番に向けて稽古を行い、その合間に酒を酌み交わし、農民同士情報交換をする場でした。神社と歌舞伎、

## ■鈴鹿・長宿地区の試み



**入** 谷歌舞伎会の活動の中心地となる鈴鹿・長宿地区では、平成6年にまちづくり協定を締結。地域住民の自主的な努力により、昔ながらの湧水に恵まれた美しい街なみを維持し、平成15年度《都市景観大賞優



宿の地域が一丸となって取り組む事業が、数々の行事を通じて今後も座間市全体に波及してゆくことを願っています。

秀賞》、平成16年《まちづくり月間国土交通大臣表彰》など数々の受賞・表彰歴があります。私自身、若い時から様々な活動に従事してきましたが、その原動力はすべて「仲間」です。絶対にひとりでは何もできない。人との関わりがあつて初めて、物事は動いていくものだと思います。鈴鹿・長



**鈴鹿長宿竹灯りの夕べ**  
鈴鹿・長宿の街なみに1,200基もの竹灯りを並べ、幻想的なうそくによるライトアップを楽しむ。平成23年より毎年秋に開催され、3,000人以上が訪れる。